

Title	韓国の神学について：ユルゲン・モルトマンとの関わりから
Author(s)	洛, 雲海
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 61-84
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4211
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

韓国の神学について

——ユルゲン・モルトマンとの関わりから——

洛 雲 海

はじめに

去る二〇世紀、アジアの一角に一つの奇跡が起こった。朝鮮半島の南方、韓国において起こったキリスト者急増という奇跡である。一国の宗教人口比率に正確な統計を期待することは困難であるとしても、韓国では国民の約四分の一が自覚的キリスト者になっていると言われて久しい。韓国ではプロテスタントによる宣教が始まって以来まだ一三〇年を経っていないにもかかわらず、韓国は宣教師派遣人数が米国について世界第二位、人口比率から見た宣教師数では世界一の大国となっているという現実がある。

一方で韓国の近現代史が帝国日本の植民地支配による搾取と抑圧、戦争による民族と国家の分断、その後の軍事独裁政権による非民主的統治と弾圧、すなわち「苦難」によって蔽われてきたという歴史があり、他方でその苦難の中で多くのキリスト者と教会が誕生し、東北アジアでは最もキリスト教信仰の影響力が強い国となったという現実がある。しかも、これら二つの現実が韓国においては一つに結合しているのである。韓国のキリスト教に目を向ける者は、個人の

実存と信仰の問題を越えた歴史と信仰の問題に国家的「苦難」が深く関わるという現実を深く認識させられる。それは神学についても同様である。つまり、そのような苦難の歴史の中で生まれ展開されてきた韓国神学の深層には、個人の実存を越えた国家の歴史と状況の問題が神義論的な問題と共に横たわっていることを考えさせられるのである。

ところで、これまでモルトマンの下で学び、神学博士の学位を取得した韓国人は九名にのぼる。彼らは帰国後、韓国の諸神学校で神学教育と研究あるいは教会での牧会に従事してきたし、現在もしている。これらの神学者たちによって教育を受けた神学生たちが毎年数百人規模で韓国キリスト教界に巣立って行く。また、モルトマン自身もこれまで少なくとも八回（二〇〇九年の訪問時点）に渡って韓国を訪問し、韓国神学界との交流を温めてきた。それは、韓国キリスト教界がモルトマンに関心を持ち、モルトマンから学ぼうとしたからだけではなく、モルトマン自身が韓国を特別心に留め、交流を望んだからだと言えよう。

モルトマンの韓国人との交流の幅は教派や教団を越えて大きく広い。交流の初期には韓国の民衆神学者たちを中心とした進歩的性格の強い神学者たちとの交流が主であったようであるが、その後交流の輪は拡大し、近年はペンテコステ派を代表とする保守的陣営からも招聘・歓迎されるようになってきている。モルトマンは現代の世界的神学者の中、韓国では最も広く関心を持たれ、学びの対象とされ、影響力ある神学者と言えるのである。

本稿は、上記のような韓国の歴史的かつ状況的問題を念頭に置きつつ韓国の代表的な神学を取り上げ、これをモルトマンとその神学との比較を通して分析した筆者の博士論文『モルトマン神学と韓国神学』の内容紹介である。

論文の研究目的は、韓国神学全般を取り上げて、これを歴史神学的観点から紹介し論じることにはなく、組織神学的観点から韓国神学と呼ばれ得る諸神学のうち代表的な三つの神学（民衆神学、趙鏞基チョウヨンギ神学、統全的神学）を選択してそれらとモルトマン神学との関係を論じ、そしてモルトマン神学が韓国神学に与えた影響について考察することにある。最終目的は、以下の三点にある。すなわちモルトマン神学と選択した三つの韓国神学との1. 接点に対する照明、

2. 共通点の解明、3. 影響についての証明である。

以上の作業を通して、神学的立場も管まれている場所も信仰のかたち（礼拝形式や信仰形態の表現方法など）もそれぞれ大きく異なる三つの韓国神学が、それぞれの仕方でもルトマンとその神学との共通点を持ち、また彼から影響を受けているという事実を明らかにしようとするものである。

1. なぜモルトマン神学と韓国神学なのか——韓国の諸神学の紹介を兼ねて

韓国神学を考える際、われわれは三つの神学を選択した。それは民衆神学、韓国ペンテコステ派をリードする趙鋪基神学、そして今や長神チャインシヤ大神学と呼ばれつつある統全的 (holistic) 神学⁽¹⁾である。これら三つの神学は、すべて韓国人キリスト者によつて、韓国で独自の展開を遂げてきたという共通性を持つ。しかし、その性格には明確な相違点が見られる。

まず、民衆神学とそれを担う神学者たちは、その特殊性から韓国社会でも世界的にも最も目立ち最も注目を浴びる存在ではあった。しかし、彼らとその神学は韓国キリスト教界においては少数派であった。彼らは政治的にも社会的にも神学的にも韓国のいわゆる進歩陣営を代表し、一九七〇年代から一九八〇年代にかけての韓国民主化運動を強くリードしかつこれを推進した人たちである。民衆神学者たちは、不義なる権力や社会的強者に対しては闘争的であったが、不義のために泣いている社会的弱者に対しては友となろうとしたし、友であった。彼らには正義のために思想と行動をもつて権力に対して立ち向かう勇氣があつた。彼らには正義をもつて民衆を愛する愛があつた。

韓国ペンテコステ派とその神学を代表する趙鋪基は、韓国キリスト教界に大きな聖霊運動を引き起こし、キリスト者

数の増加に莫大な影響を与えた。彼らの立場や思考様式は政治的にも神学的にもいわゆる保守的なもので、韓国社会の中で保守陣営に属する人々を支え、リードする役割を果たしてきた。また彼らは、一方でいわゆる祈福音仰（御利益的信仰）の強調によつて福音を变质させ、この世的な幸福追求へと信徒たちを駆り立てているとの批判を教団の外からしばしば投げかけられてきたが、他方で貧しきや病氣のためあるいは他の様々な困難のために絶望の淵に追い込まれているような人々に向かつて明快な仕方で祝福を語り、福音を通して希望を与え続けることにより、社会から大きな支持を得てきた。その結果、趙鏞基の創立した汝矣島純福音教会は一個教会としては世界最大の教会にさえなつた。⁽²⁾ 趙鏞基とその支持者たちの教えは、個人の心の癒しや魂の救いに留まらない。彼らは肉体を含めた全人的癒しを主張し、これを目に見える形で人々に訴え、望んだ事柄の成就を具体的に目で見、肌で感じられるよう体験させることを通して救いの希望を新たに持たせ、再び立ち上がる力を得られるように多くの人々を励ましてきた。彼らは聖霊の御業を目に見えるものとした。その全人的救いの主張は、今や社会的地球的規模にまで拡大されてきている。彼らは希望によつて立つている。彼らは祝福と福音によつて希望を見つめ、希望を語り、希望したことの成就を確認しつつ新たな希望を産み出して行く。彼らには希望をもつて人を愛する愛がある。

統全的神学を唱道する神学者たちは、主として韓国キリスト教界の中で最大教派である大韓イエス教長老会統合が直営する代表的神学大学、長老会神学大学校（すなわち、長神大）に属している。彼らは韓国キリスト教界の主流にあつて活動している。しかし、彼らの立場は一様ではなく、政治的にも社会的にもいわゆる進歩から保守に至るまで多種多様である。神学においても同様である。彼らは、エキクメニカルな意味で他者と共にいることのできる人々である。彼らは個人レベルで見ればそれぞれ自らの立場がはっきりしている。しかし、互いの違いを相互に認め合うことができ、しかも共にあることを許容できる力量がある。彼らの中には保守的正統主義的傾向の強い者もいるし、進歩的路線上にある者もいる。また自由主義神学的傾向を持つ者もいる。純福音的性向の者もあり、民衆神学者もあり、ある種の土着

化神学を模索する者もいる。⁽³⁾しかし、皆一緒にいることができるのである。ここには多様性を相互に受け入れることのできる愛がある。

このように、性格的にも性向的にも立場的にも違いが見られる三つの陣営であるにもかかわらず、三者には神学的に共通している点がある。それはそれぞれにモルトマンと接点があるということであり、それぞれがモルトマン神学との共通点を持ち、そこから影響を受けているということである。これら三つの韓国神学は、それぞれモルトマンとの交わりを大切にしてきたし、彼の影響力は韓国神学界全体において近年ますます大きくなってきているように見える。おそらく、二〇世紀後半以降の韓国において、モルトマンほどに韓国神学に影響を及ぼしている現代神学者はいないのである。

もちろん、韓国には上述の三つの神学以外にも多種多様な諸神学が存在するということについては一言述べておく必要があるだろう。例えば、韓国では現在もなお圧倒的多数を占める保守的福音主義陣営を代表する伝統的・正統主義的諸神学があるし、⁽⁴⁾その対極にある進歩主義的な諸神学や自由主義的諸神学もある。⁽⁵⁾さらには、自由主義神学の線上にあつて韓国の民族性や習俗、伝統的思考様式などを積極的に導入し、これを神学に適用しようとする、いわゆる土着化神学と呼ぶべき神学もある。⁽⁶⁾

柳東植^{ユドシク}（一九二二〜）は韓国神学の流れを三つに類型化した。第一の流れは教會的保守主義神学、第二の流れは進歩的社會参与の神学、第三の流れは文化的自由主義神学の流れである。⁽⁷⁾この類型に従つて韓国神学の初期からの流れに目を向けてみれば、第一の教會的保守主義神学の流れに属する代表的神学者としては、長老派の吉善宙^{キルソンジュ}（一八六五〜一九三五）や朴亨龍^{パクヘヨリョン}（二八九七〜一九七八）が挙げられる。吉善宙はキリスト教の保守的根本主義思想をもつて教會の非政治化と救霊運動を展開し、日帝支配下における民族的危機を靈的運動によつて克服しようとした人物であつたし、朴亨龍は一九二〇年代米国プリンストン神学校のいわゆる保守的正統主義神学を継承し、帰国後はこの立場に立つ

た神学の建設と教育を試みた神学者であった。第二の進歩的社會参与の神学の流れに属する代表的な神学者としては、二〇世紀初期の帝國日本の統治下という困難の中にあつて、既にエキュメニカルかつ進歩的社會参与を目指す神学思想をもつて社会的・宗教的・教育的活動をした監理教（メソジスト）の尹致昊（一八六四～一九四五）や、聖書の高等批評を受容したために自由主義神学者というレッテルを貼られ、一九五二年の朝鮮イエス教長老會總會で罷免かつ除名され、結果として大韓基督長老會の誕生に決定的役割を果たした金在俊（一九〇一～一九八七）がいた。さらに第三の文化的自由主義神学の流れに属する代表的な神学者としては、儒学出身の神学者として韓國の伝統文化や在来宗教とキリスト教との出会いを模索した崔炳憲（一八五八～一九二七）、また一九三〇年代に韓國最初の組織神学概論を書きながらもキリスト教の排他的絶対性を主張せず、復活信仰についての言及も少ない鄭景玉（一九〇三～一九四五）のような神学者がいた。⁽⁸⁾

文化的自由主義神学の線上で韓國土着化理論を構築し展開した神学者としては尹聖範（一九一六～一九八〇）や柳東植が挙げられる。尹聖範は土着化神学の素材をキリスト教的伝統（主としてカール・バルト）と韓國の文化的伝統（壇君神話、鄭鑑錄、栗谷の思想）に求め、「カム論（가문）」、「ソムシ論（심외론）」、「モツ論（못론）」といった韓國語を用いて韓國神学を樹立させようとしたし、柳東植は韓國在来宗教のうち福音の内容が反映されたものとして新羅時代に活躍したウオンヒョ（允豆）の大乗仏教や崔スウンの東学思想（天道教）を高く評価し、他にも韓國神話や古代の祭天儀、新羅の花郎道（風月道）、崔チウオンの風流道、栗谷の儒教思想などの研究を通して、風流神学という韓國独特な神学を樹立し展開させた。柳東植の韓國土着化思想は、全景淵の批判を発端とし一九六三年には韓國神学者一二名を巻き込んだの土着化論争を引き起こすまでに至るほどに注目を浴びるものとなった。⁽⁹⁾

以上の他にも韓國には韓國神学と呼ばれ得るような諸神学が出現したが、現代の特に二〇世紀後半以降今日に至るまでの韓國プロテスタント教界にあつて韓國キリスト教界ならびに韓國社會に大きな影響力を持ったし、また持ちつつあ

る韓国神学と言え、何よりも上掲の民衆神学、趙鏞基神学そして統全的神学の三つを挙げるべきであろう。民衆神学は韓国社会の民主化運動において思想的ならびに実践的推進力の役割を果たし、また純福音教会の趙鏞基の教えは韓国プロテスタント界全体にとって伝道の推進力となってきた。さらに、統全的神学は韓国キリスト教最大教派の中に存する多様な諸神学の中で、今やその中の一つの神学というよりは、各種多様な諸神学がそれによって包摂統合されていくような神学的位置を獲得しつつあるのである。

2. 実践的かつ統全的 (holistic) 神学としてのモルトマン神学

二〇世紀後半のヨーロッパ神学界を代表する神学者たちの中、韓国神学会で特別大きな関心が向けられ、また広く受容されている組織神学者はモルトマンである。なぜであろうか。その理由解明のために本研究が特に注目したのはモルトマンとバネンベルクであり、両者の神学の間にある性格と方向性の相違点である。中でも歴史概念の受容と展開の仕方における両者の相違を浮き立たせることよって、「テオリア的神学」(バネンベルク)か、「テオリアとプラクシスの統合的神学——実践的、神学」(モルトマン)か、という性格上の違いを提示しようとした。⁽¹⁰⁾ 要するに、われわれはモルトマン神学のこの実践志向的性格が韓国でモルトマンが広く受容された理由と考えたのである。モルトマン神学の実践志向的性格は、初期モルトマンにおいてすでに明瞭に見られる。⁽¹¹⁾ しかもこのことは後期モルトマンに至るまで一貫している。初期から見られたこのモルトマン神学の実践的性格は、後に神の創造世界全体における「神の国の形成」という実践的課題へと展開されていくことになる。

モルトマンは人間の霊と魂ならびに教会、またそれまではこの地球上の世界に留まっていた神学的関心の多くを宇宙

全体へと拡大させた。そして宇宙全体を視野に入れた神の国の生成とその実現を神学的関心の中心に据えたのである。教会に関しては、エキュメニカルな未来を指向する神学を展開した。モルトマンは自己のキリスト教的由来が改革派と福音主義にあることを自覚しつつもそこに留まらず、カトリックと東方正教会さらにはペンテコステ運動を展開する教会まで含めて、今日生成しつつある新しい同盟と新しい差異とをエキュメニカル神学とその実践のために役立てることを提唱する。このように、モルトマン神学は神の国とエキュメニカルな未来を指向する神学として統全的 (holistic) であり、またその統全性の実現のために教會的責任のみならず社会的責任をも果たそうとする神学として、神の国と神の義のための実践的神学を指指そうとするものと言えるのである。

3. 韓国神学

(1) 民衆神学

韓国神学ということで、第一に取り上げるのは民衆神学である。しかし、民衆神学については、そのプロレゴメナとして、モルトマン神学にいち早く注目し、これを韓国に紹介した神学者たちについて言及する必要がある。モルトマンとの人的関係という観点からすれば、モルトマンと社会参与という実践的次元での連帯関係あるいは同志関係にあった民衆神学者たちを第一に考える必要があるが、モルトマン神学からの影響という観点からすれば、翻訳を通してモルトマン神学を最初に紹介した彼らこそはその第一の人々であったと言うべきであるからである。

韓国神学に対するモルトマン神学の影響を考えると、モルトマン神学の紹介者たちの存在を抜きにして韓国神学を

語ったことにはならないであろう。われわれはその先駆者として朴鳳琅、全景淵、金均鎮の三人について言及しておこう。彼らはいずれも韓国基督教長老会（以下、基長と略）に属しながら、その多くが同じ基長に属した民衆神学者たちとは別の流れに属する人々であった。彼らは、一方で韓国カール・バルト学界を創設した新正統主義的神学者たちであり、バルト神学の紹介と受容によって韓国神学を世界的水準にまでアップグレードさせた人々である。他方、モルトマン神学の紹介と受容によって、後に韓国神学界に新しい局面をもたらす統全的神学にとつても先駆的役割を果たした人々とも見なせる。

さて、モルトマンは民衆神学をどう見ていたであろうか。モルトマンは学としての民衆神学と同時に民衆神学を担う学者たちの生き方に注目した。特に、民衆神学者たちがキリストの福音を「抑圧され、苦しみ、自由と尊厳を渴望している民族の眼」で読み始めたこと、また彼らにとつては思索と行動とが一つとなつていることにモルトマンは注目したのである。モルトマンの目には、民衆神学者たちの思考様式と行動様式の中に「相互認識から相互参加へ生きる」というエキユメニカルな志向様式と行動様式に相通じるものがあると映つたのである。その鍵をモルトマンは民衆神学者たちが実践する貧しい人々、労働者、農業従事者たちとの「交わり」と「一致」において見出した。それ故に、モルトマンは民衆神学を「民衆全体の苦難の状況における信仰の経験と実践から出て来た神学」と定義したのである。モルトマンは民衆神学の実践的性格を高く評価し、民衆神学に親近感を得たが故に、「われわれは民衆神学者たちから学ぶことができる」とさえ語つた。モルトマンと民衆神学者たちの関係は、神学の実践面における同志的關係であり、連帶的關係であつたと言えよう。

民衆神学自体については、われわれは徐南同と安炳茂の思想を中心にして分析を試みた。その分析から明らかになるのは、民衆神学者たちの神学的姿勢が「新しき創造と形成のための破壊」を指すものだということである。つまり、彼らは当時の軍事独裁体制下にあつて民衆の側に無条件で立ち、対外（社会）的には「民主化」をスローガンとし

た社会変革を標榜し、対内(教会と神学)的には脱伝統・脱西欧・脱神学・反神学を標榜しつつ、これを実践することで社会においても神学においてもパラダイムの転換をラディカルに試みたのであり、そうした神学的行動が「新しき創造と形成のための破壊」を目指す実践的神学となったということである。その意味で、われわれは民衆神学を一つの「闘う神学(テオロギア・ミリタンス)」と定義した。

民衆神学者たちは韓国社会の中で、「正義」と「人権」のために闘い、また闘うために神学をしてきた。重要な点は、民衆神学がこの闘いという実践を通して深化発展した神学であったという点である。また、民衆神学がこの闘いを通して此岸における「メシア王国」の到来を目指したという点も重要である。徐南同にとつての「メシア王国」とは「千年王国」のことである。それは「神の国」の象徴と合わせて一つとされるといふ特徴を持つものである。したがって、民衆神学にとつて「メシア王国」の到来と「神の国」の到来は別々のことであつてはならないわけで、その二つの象徴をあえて「神の国」という象徴に統合することが許されるなら、民衆神学とは「この世における神の国の到来のために闘う実践的神学」であると定義することもできるであろう。

われわれは本研究において民衆神学の解釈学的パラダイムの基調として「合流」(徐南同)と「事件」(安炳茂)に注目したが、ここでは特に「合流」について取り上げてみよう。なぜなら、徐南同にとつて「合流」とは「互いに異なる伝統が合わさつて一つとなることそれ自体」であり、その方法なのであるが、そうであればこの「合流」という方法は「統合」の方法とも相通じる部分があると見なせるからである。もともと民衆神学はアンチテーゼの神学という性格を持つものであつた。しかし、このアンチテーゼの神学が「合流」という方法を用いるのであれば、アンチテーゼとしての民衆神学は、「合流」という方法によりテーゼとアンチテーゼの対立を越えてジュンテーゼに至ろうとする神学であるとも見なせるはずである。民衆神学はこの「合流」という方法を社会にあつてラディカルに適用したのである。この試みを「穏健かつ全体的」な仕方ですべて適用しようとするなら、民衆神学の試みは統全的神学の試みとも

共通項を持つものと考え得るであろう。なぜなら、「合流」の方法は「互いに異なる伝統が合わさって一つとなることそれ自体」であるという点で、他者に対して開かれたものであり、他者との交わり、他者との一致を目指す方法であることに違いないからである。

(2) 趙鏞基神学

第二に取り上げる韓国神学は趙鏞基神学である。この神学については、趙鏞基の神学そのものに先立って、まず神学者モルトマンと神学者趙鏞基との出会いに注目した。なぜなら、二人の出会いはその自体が一つの大きな出来事と見なせるからである。

モルトマンによれば、二人の最初の出会いは一九九五年であった。その出会いにおける対話によって、両者はそれまでの生の歩み方や信仰の諸経験そして神学における類似点を互いに持つことに気づいた。そして、それによってモルトマンはそれまで趙鏞基に対して持っていた疑いの念が深い紐帯の念へと変化する体験をすることになったのである。モルトマンによれば、生の歩み方や信仰の諸経験に関する両者の類似点とは、例えば生家の非キリスト教的家庭環境、一七歳の時の臨死体験、また戦争体験やその後の働きを「恨」^{ハム}において始めた点などである。また神学における類似点とは、モルトマンによれば、希望の神学とペンテコステ運動がブルームハルト父子の名と結び付き、両者ともドイツ覚醒運動を共通の霊的根として持っているということである。その後始まった二人の交流は、後に驚くべき出来事を引き起こすことになった。すなわち、趙鏞基がそれまでの自己の信仰と神学をモルトマンに対して悔い改め、「人間を志向する」方向から「この世を包容する」方向へと神学的方向転換をしたということである。われわれが注目するのは、まさにこの点である。

モルトマンは趙鏞基神学の中に希望の神学と生命に満ちた福音を発見した。しかし、それと同時に、趙鏞基神学に対して四つの提言をした。それは第一に、生命に満ちた福音を理解するために十字架のみならず復活のキリストの中心的意思を強調すべきであるということ、第二に、人間は希望にあつて蘇生するものであるということ、第三に、聖霊の生命力は復活のキリストから教会と世の中へ送られるものであるということ、第四に、聖霊の賜物を受けるという経験と関連させて、われれは世代主義―終末論を離れ、降臨―終末論を必要とするということである。このような提言によつて、モルトマンは趙鏞基神学における祝福と福音理解に統全的な視点から光を当て、趙鏞基神学が新しい段階へと展開していくための道を開いたのである。それは二〇〇四年六月のことであつた。そしてあの驚くべき出来事、モルトマンが「驚異の転換点」と呼ぶ出来事が翌二〇〇五年の年頭に起こつた。趙鏞基は教会の礼拝の中で「人間を志向する方向」から「世を包容する方向」への転換宣言をした。それは全人的な救いとJ P I C (Justice, Peace and the Integrity of Creation) を共に重視する方向への転換宣言であつた。しかも、この方向転換は趙鏞基個人の神学的方向性のみならず教会の対社会的責任という役割に関する実践的方向性においても適用されたのであつた。われわれはここに趙鏞基神学の重要な側面を見出した。それは、趙鏞基神学においてもテオリアがプラクシスへと直結しているという側面、すなわち「テオリアとプラクシスの統合」という側面があるということである。それが、あの転換宣言以来、より顕著なものとして進展してきつつあるのである。

しかしながら、われわれは趙鏞基神学の中に「世を包容する方向」への転換の種が元より存在していた可能性があることも指摘しておいた。もともとモルトマンは、霊魂と肉体に関わる全人的救いを主張する趙鏞基神学は評価できるとしても、その神学が救いの領域の中に全被造世界あるいは宇宙的次元を含めて考えてこなかつた点を趙鏞基の神学的問題の核心として捉えたが故に提言をしたはずであつた。しかし、趙鏞基の神学を初期のものから分析してみると、趙鏞基にとっての救いの領域とは元来人間の霊魂と肉体だけでなく、宇宙的次元までを含めた全被造世界に及ぶものであつ

たことに気付かされるのである。趙鏞基にとつての救いはもともと極めて此岸的なものであり、それは祝福という形で「全てのこと」に及ぶと主張されていたからである。この「全てのこと」とは趙鏞基にとつて日常生活全体を指すものであるし、広義に解釈すればそれは政治、経済、社会それに被造世界全体が関わる環境や宇宙までをも含むものなのである。ただし、そのことは初期趙鏞基神学においてはまだ明瞭ではなかった。趙鏞基神学の中で、まだ明瞭ではなかったにしろ確実に存在していた種が、モルトマンとの出会いによって発芽し、方向転換宣言後にはこれが教会の実践を通して具体的に成長しつつあると見られること、そのような意味でモルトマンは趙鏞基に対して決定的な影響を及ぼしたということをわれわれは指摘したのである。なお、モルトマン神学も趙鏞基神学も共に「希望」を核心理念として構成展開していること、またその「希望」とは両者共に「神の国の臨在」に関わるものであることにもわれわれは注目した。両者の神学には「希望」によつて「生命を生かす」ことを強調するといった共通点もあるのである。総じて、趙鏞基神学もまた「神の国のための実践的神学」という性格を持つものであり、趙鏞基による二〇〇五年の転換宣言後はより統全的性格が明確化してきたことが確認されるのである。

(3) 統全的神学

第三に取り上げた韓国神学は統全的神学である。これは大韓イエス教長老会（統合）の直営する韓国最大規模にして、現在最も影響力のある長神大の代名詞的存在となつている神学であつて、アジアから世界に向けて発信する神学という性格を持つ。韓国において統全的神学を初めて提唱した神学者は李鍾聲イジョンソンであり、これを継承する形で現在最も精力的にこの神学を構築展開している神学者は金明容キムミンヨンである。

李鍾聲はアジアの有色人種として、欧米神学の抱える問題点を背景に統全的神学を提唱し始めた。李鍾聲の考える欧

米神学の問題点とは、総じて有色人種や他宗教、他の諸文明に対して白人が自己の内に抱える差別意識や現実軽視というものにある。そのようなものに基づいて構築展開されてきた欧米神学の誤解や曲解を修正する意図のもと、聖書と福音と普遍性を三つの柱として差別や偏りのない神学を目指したものが李鍾聲の考える統全的神学である。

金明容によれば、統全的神学は統合性 (integrity) と全体性 (Wholeness) の双方に重点が置かれている。しかし、それは決して混合主義とは違う。統全的神学とは「可能な限り全ての真理」を統合し、しかも全体性(穩全性—온전성)を志向する神学、また宇宙万物が神の救いの対象であり、その働きの場が万有の中にあるという信仰に立脚した神学である。このような統全的神学と方向性を同じくする神学として、われわれはペンテコステ派の神学、福音派系の神学(ローザンヌ世界宣教会議系の神学)、エキュメニカル神学(WCC神学)に注目し、これらの神学が全て統全的神学の方向に向かって歩みを進めていることを確認した。それらは社会、歴史そして宇宙を救う神の国の福音の全体性に基つき、対教的には一致を、また対社会的にはJPIICを核心に置き、全体的人間理解とこの世における神の国の具現化追求、被造世界全体を含む宇宙的神学の展開、そしてその責任遂行を自覚するということにおいて共通項が見られるのである。

また金明容によれば、統全的神学とは(1)エキュメニカル運動の神学と福音主義運動の神学の統合を志向し、(2)プロテスタント神学とカトリック神学ならびに東方正教会の神学を総合的に検討評価し、(3)キリスト教神学のみならず、全ての宗教と文明の諸内容を神学的に検討評価し、(4)神学と他の学問の対話を重要視して他の学問に対する神学的評価と神学的指導を遂行し、(5)イエス・キリストにおける啓示の究極性と聖書の規範性を前提とするような神学である。またその特徴は(1)三位一体の神学、(2)完全な福音、(3)全人性の神学、(4)教会とこの世のための神学、(5)宇宙的神学、(6)神の国のための神学、これらのことを追求することにある。換言すれば、統全的神学とは、三位一体なる神のペリコレシスの愛のコイノニアとディアコニアに基づく神の国を、教会においても現実社会

においても宇宙全体においても実現させようとする神の国のための実践的、神学と要約できるであろう。

(1) 金イテの「中心に立つ神学」——長神大神学の統全性の先駆として

以上のような統全的神学の性格を持ち、これを推進させようとする神学として、われわれは長神大神学と大韓イエス教長老会（統合）の神学を選び、その統全性を分析した。長神大神学の統全性については、統全的神学の先駆的役割を果たしたものととして、金イテの「中心に立つ神学」（一九八二）を取り上げた。その神学の中に、われわれは後に長神大神学が統全的神学へと発展していくための先駆的素地を見出したのである。では「中心に立つ神学」とはどのようなものか。

第一の特性は「包括的」ということであり、神学的伝統にしても聖書にしても、部分ではなく、その全体を受け入れることを重視するということである。第二の特性は「緊張の中にある」ということであり、これは「伝統と革新」の緊張、あるいは「信仰と理性」の緊張の中に自らがあるということをよく自覚するということである。第三の特性は「旋風ののではなく漸進的である」ということであり、これは信頼するに足る責任的神学（金明容）を目指すという意味として捉えられる。しかも、この「中心に立つ神学」は社会に向かい行く神学の必要性を強調するものであるという点にわれわれは注目した。この点で、「中心に立つ神学」もまたテオリアとプラクシスの統合を志向する神学、社会に向かって行動を起こす実践的神学を目指す性格のものであるということが確認できるのである。以上のような性格を総合して、金明容は金イテの「中心に立つ神学」を李鍾聲の統全的神学とほぼ一致するものと見なし、「統全的神学を表現するもう一つ別の表現」とさえ述べた。

(2) 大韓イエス教長老会(統合)の統全性

次にわれわれが試みたのは、大韓イエス教長老会(統合)という教団が持つ統全性の確認である。その確認作業を「長神大神学声明」(一九八五)、「長老会神学大学校神学教育声明のための基礎文書」、「二一世紀長老会神学大学校神学教育声明書」、「二一世紀大韓イエス教長老会信仰告白書」という四文書の分析を通して試みた。そこで明らかになることは、いずれも「われわれは統全的神学の道を歩むこと」(金明容)を表明したということである。このことを具体的に整理し確認してみよう。

まず長神大神学は、(1)福音的かつ聖書的神学、(2)改革主義的かつエキュメニカル的神学、(3)教会と神の国のための神学、(4)宣教的・歴史的・社会的・参与的神学、(5)神学の間を韓国、アジア、世界とする神学、(6)社会の諸問題に応答する実践的神学、(7)対話的な交わりの神学を目指すという性格を持つものとされるとされる。また長神大の神学教育は、三位一体なる神の国を福音の基礎とし、これを福音伝播の中心とし、神の国の具現化を目的とする教育、神の国のための実践を目指す教育を行うという意志を持つものである。大韓イエス教長老会の信仰とは、(1)三位一体の神に対する徹底した信仰を基盤とし、(2)生態学的視点の導入により、全被造世界の破壊が、神と人間と被造世界の罪による交わりの断絶という罪の問題によつて捉えられ、(3)子なるイエス・キリストは全人類と全被造物に対する救贖者、和解者、仲保者であり、(4)聖霊を生命の付与者、天地の創造者、礼拝と栄光をお受けになる方、宇宙万物の救贖者とし、万物の創造から万物の更新までをその働きと関連づけ、(5)教会と神の国については、両者ともこの世における現存と実現に強調点を置き、その使命を福音伝道とJ.P.I.C.に置き、(6)イエス・キリストの再臨に結びつく未来の新しい天と新しい地は、神と人と万物が愛と生命の交わりを分かち合う国であること、これらのことを告白する信仰である。総じて、この大韓イエス教長老会信仰告白書には統全的方向性が導入されていること、また

J P I C 概念と宇宙的状况が全体に反映されていること、さらに三位一体の神におけるペリコレシス的な交わりの概念が核心的な役割を果たしていることなどに特徴を見出すことができるであろう。

ここで社会的三位一体論を展開したモルトマン神学を思い起こすなら、われわれはこの信仰告白書全体においてモルトマン神学との驚くほどの共通点が見られることに気付かされるのである。実に、このことは信仰告白書だけに留まらない。それは「長神大神学声明」(一九八五)を始めとし、「長神大基礎文書」や「二一世紀長神大神学教育声明書」においても当てはまることと言えよう。⁽¹²⁾

今や、われわれが冒頭に掲げたあの問い、「なぜモルトマン神学と韓国神学なのか」に対する答えもある一点については明白となったのではなからうか。われわれの選んだ韓国神学には、民衆神学にも趙鏞基神学にも統全的神学にもその核心部分においてモルトマン神学との共通点があるということである。しかもそのことは、韓国神学もモルトマン神学も統全的性格を持つということに集約できる。それに加えて、それぞれの内容と強調点に差異はあるとしても、モルトマン神学と韓国神学にはいずれも「神の国のための実践的、神学」という性格を持つという共通項も見られる。モルトマン神学は、統全的方向を志向する「神の国のための実践的、神学」であり、われわれが注目した三つの韓国神学も統全的方向を志向する「神の国のための実践的、神学」であると言える。この共通性こそがモルトマン神学と韓国神学とを堅く結び付ける要因なのである。

4. もう一つの共通点——パラダイムの転換

モルトマン神学と韓国神学の共通点として、われわれは神学の「統全性」と「神の国のための実践的性格」という部

分に注目し、これに焦点を当てて分析を試みた。そこには意外にも驚くほどの共通性が発見された。これを驚くほどと語る理由は、単純である。韓国神学として取り上げた三つの神学は、主観的印象によって言えば、それぞれの性格における相違があまりにも大きいように思われるからである。

民衆神学者たちは進歩的かつ自由主義的陣営の代表として認知されてきた。彼らの聖書解釈の方法と内容、教会理解と教会形成の実際、軍事独裁政権下におけるラディカルな政治的スタンス、民主化運動への具体的な参与と社会革新的行動様式などは、既存のいわゆる伝統的キリスト教の立場から見れば、キリスト教破壊的と言ええるようなものとして目に映ることもあつたはずである。

他方、趙鏞基の属するペンテコステ派の人々は、神学的にも政治的にも保守的陣営の代表として韓国では認知されてきた。彼らの聖書解釈の方法とその内容を始めとし、教会理解の仕方や政治的スタンスなど、どれも頑固なほどに根本主義的なものであつた。

統全的神学を始めた長神大の神学者たちはどうであろうか。彼らのスタンスは政治的にも神学的にも多様であり、聖書解釈の方法から政治的スタンスに至るまで、保守陣営から進歩陣営に属する者まで幅広く存在する。

しかし、われわれは本研究の課題と取り組むうちに、モルトマン神学と韓国神学の間には上に掲げた「統全性」と「神の国のための実践的性格」とは別にもう一つの共通点があるということにも気付かされた。それは、いずれの神学も「パラダイムの転換」を試みたということであつた。

まず、モルトマンは神学のパラダイムに根本的な転換をもたらした神学者であると評価できよう。すなわち、いわゆる伝統的な神学が「人間の霊魂中心的」なパラダイムの中で神学を営んできたとすれば、モルトマンはこれを「神の国中心的」なパラダイムへと転換させたということである。これは、モルトマン神学において決定的であるばかりでなく、その後の世界の神学界にとって決定的なものとなつた。その証拠に、例えばモルトマン神学の影響を大きく受けて

いる。「長神大神学教育声明書のための基礎文書」がいかに徹底的に「神の国」に焦点を合わせて作成されているか考えてみると良いであろう。

民衆神学者たちは神学と教会それ自体の変革を標榜し、いわゆる伝統的神学と対峙し、「反神学」や「脱神学」を訴えて神学におけるパラダイムの転換をラディカルに試みたのであった。それは彼らなりの仕方で、この世に「メシア王国」すなわち「千年王国」と共にある「神の国」を到来させようとしたためであったということと密接な関係があると考えられる。

趙鏞基についても、モルトマンとの出会いとその影響によって、自己の信仰と神学において「人間を志向する」方向から「この世を包容する」方向へと神学的方向転換をすることになったということとは既に触れたとおりである。これは、趙鏞基神学と純福音教会にとつては、一つの重大なパラダイム転換であったと言える。

統全的神学はどうであったか。長神大神学としての統全的神学は、モルトマンと共に「人間の霊や魂を中心とする」パラダイムから「神の国を中心とする」パラダイムへと神学の方向も教育の方向も転換させたのであった。

以上のように、モルトマン神学も韓国神学も皆、それぞれの仕方でも神学におけるパラダイム転換を果敢に試みたことが確認される。その転換作業には伝統や過去と決別し、自らを変化させなければならないという痛みが伴うであろうが、真理のためにはその痛みを乗り越えようとする力と勇気がそれぞれの神学にあったことを思わずにはいられない。

5. 統全的神学の今後の課題

金明容によれば、統全的神学は今日の世界の諸神学がそこに方向を定めつつあるような神学である。その限り、今や

韓国の神学者たちはこの統全的神学の構築と展開をもって世界の神学界の重要な一端をリードしつつあると見なせるのではないであろうか。なぜなら、この統全的神学が今や世界の他のどこよりも韓国において、韓国の神学者たちを中心にして強力に展開されつつあるからである。

しかし、統全的神学は未だ出発を始めたばかりの神学であり、またその形成途上にある神学である。そこで、自覚的に統全的神学を推進していこうとする者たちにとっての課題を以下に列記しておこう。

- (1) 統全的神学のさらなる展開と発展
- (2) 神の国のための実践的、神学のさらなる推進
- (3) 韓国の諸神学と諸教会の統合ならびに世界中の諸神学と諸教会の統合
- (4) 諸学問や諸宗教との対話の推進
- (5) この世における教会と神学の公(共)的責任についての追及と遂行

統全的神学を展開する者は、モルトマンがそうであったように「神の国のための実践的、神学」を展開する者である。より具体的には、彼は教会の内に入って行き、また教会の内からこの世に出て行って、どこにおいても神学しつつ同時に宣教することである。教会の内にもついでにただではならない。教会の外に出て行くだけでもいけない。教会の外に出て行き、教会の中へ帰ってくる、その反復運動が統全的ということである。それは、どこにあつても「イエスは主なり」(カール・バルト)と宣べ伝えることであると同時に「復活したイエスが十字架につけられた方である」(モルトマン)と宣べ伝えることである。そのような宣教的課題を統全的神学は持っている。また統全的神学を構築し、展開していこうとする者は、一方で三位一体の神の内にある愛のペリコレシス、コイノニア、ディアコニアを基調とし

た神学を推進しつつ、他方でこのペリコレシスの神の愛に基づくコイノニアとディアコニアの実践を通して、聖霊の助けを求めつつこの世にあって神の国のために努力するのである。それこそは「神の国のための神学」としての統全的神学が進むべき道であろう。

最後に、以上のような道を統全的神学によって推進し展開させようと努力する具体的な動きが、長神大教授たちを中心とした一群の神学者たちによって始められていることについて言及しておこう。二〇〇八年二月、李亨基イ・ヒョンギを所長とし、金明容を副所長とする「公的神学 (Public Theology) と教会研究所」が出帆した。李亨基によれば、この研究所の目的は「教会のアイデンティティを明確にしつつ、他の諸宗教や他の諸学問との連携 (제후—solidarity) を通して、公的領域 (人類社会と創造世界) における公的イシューを神学的に共に解いていくこと」、また「この世に向かう教会の公的責任に関する神学研究…… (ならばにその) 実践を通し、三位一体なる神の国が人類の歴史と創造世界において全体的に具現化するように目指すこと」にある。つまり、この研究所は統全的神学の目指す方向に沿って、公的領域における実践への道を具体的に歩むことを目的とするものなのである。そのような意味で、「公的神学と教会研究所」は、これまでの統全的神学の一つの具体的な結実と見なすことができるのである。

二一世紀の歩みを始めた今日の韓国神学は、統全的神学へと方向を定めつつある神学として現実に具体的な実を結び始めた。このことは、韓国神学がモルトマン神学の影響のもとで、今や世界的な神学の流れにあって重要な部分を担うものとなったことを示す一例と見なせるであろうし、韓国神学が統全的神学をもって世界の神学界を先導していく立場にもなり始めたことを示す一例とも見なせるであろう。その先頭を行くものとして、統全的神学を標榜する長神大神学は、今後世界の神学界においてもまたその枠を越えたより大きな世界においても、自己の果たすべき役割と使命の大きさをいよいよ自覚するべきであろうし、実際にそのような役割を担うものとして世界の中で「神の国のための実践的神学」の発展と推進をもって、具体的に貢献していくことが期待されるのである。

- (1) 長神大とは長老会神学大学の略称である。また長神大神学という呼称の使用と、これが統全的神学という性格を持つようになった契機については、金明容の論文「이종성의 통전적 신학」『통전적신학』(서울·장로회신학대학교 출판부, 二〇〇四)の第三章「이종성의 통전적 신학과 장신대 신학」中、特にIII-3「오늘의 장신대의 통전적 신학」771を参照。金明容によれば、長神大神学が統全的神学と呼ばれ得る契機は一九八五年に長神大教授会議で発表した神学声明にある。
- (2) 汝矣島純福音教会が世界最大の個教会であることについては誰も異論のないことであろう。しかし、実際に教会員が何人いるかということについては統計上正確なことは分からない。東京神学大学の『紀要』第五号(東京・東京神学大学総合研究所、二〇〇二年)に掲載された李鐘聲論文「韓国キリスト教会の実態——過去・現在・未来」においても、韓国教会各教派別信徒総数について一位から順に、長老派、メソジスト、ホーリネス、バプティスト、キリスト長老派、ルター派と記載されているが、ペンテコステ派については順位から除外されている。因みに信徒数は四五万人から七〇万人代まで大きな幅をもって評価されている。
- (3) 大韓イエス教長老会統合派に属する神学者たちが皆、統全的神学を支持するということでは決してないが、統合派に属した神学者たちの中で、民衆神学を標榜した者としては金容福^{ハンスホン}、ある種の土着化神学を標榜する神学者としては、近年「神土不二神学」をもって韓国的神学の構築を試みる韓崇弘^{ハンスホン}などが注目される。
- (4) 韓国キリスト教界においては、いわゆる保守的・正統主義的信仰によって立つ人々が圧倒的多数を占めている。しかし、これらの人々が依つて立つ信条に見られる神学や彼らの標榜する神学を韓国神学と呼ぶことには困難があるし、彼らもそのように呼ばれることは望まないはずである。彼らの神学は、大概是米国を主とした海外宣教師たちによつてもたらされた神学だからである。韓国では最大の改革長老教会系の諸教団を例にとると、大韓イエス教長老会に属する教団の内、数的に上位を占める「合同」「高神」「白石(旧合同正統)」などの諸教団は代表的保守教団である。さらに付言するなら、大

韓イエス教長老会という教団名を冠する諸教団の内、最大教団の「統合」を抜かした他の全ての教団はいわゆる保守的・正統主義的信仰に立っていると思なして良いであろう。ここで注意を要することは、韓国キリスト教界の状況について、統計的な正確さは期待できないことである。大韓イエス教長老会という名を冠する教団だけでも一五〇教団とも二〇〇教団とも言われ、その数は毎年変化するといった状況である。

(5) 進歩主義神学の内の一九六〇年代以降に台頭してきたいわゆる世俗化論については、柳東植『韓國神學の鑛脈』韓國神學思想史序説(서울:展望社、一九八二) 231ff. を参照(以下KKと略)。

(6) 韓国神学者の中には、民衆神学のような神学も土着化神学の範疇に入れて見る人がいる(例えば柳東植、KK 256)。このような観点は、柳東植の場合には民衆神学だけでなく、広く韓国神学全体に適用されるものである。『韓國神學の鑛脈』の翻訳として日本語で出版された『韓国キリスト教神学思想史』澤正彦・金纓共訳(東京:教文館、一九八六年)の「日本語版へ寄せて」において、柳東植は韓国の神学思想史そのものに民族文化的な意味が含まれているということを主張している。同書二頁を参照。

(7) KK25-32. また、韓国キリスト教の思想的類型については、柳東植『韓国のキリスト教』(東京:東京大学出版会、一九八七) 54-71 を参照のこと。

(8) これらの人々の他にも一九三〇年代にはすでに幾人もの神学者たちが出現していた。海外留学から帰国してきた人々が増えてきた時代である。著名な神学者には、次のような人々がいた。長老派の神学者としては南宮燦、白榮潐、李聖徽、宋昌根、蔡弼近、金在俊、尹仁駒、朴允善がおり、監理教神学者には卞鴻圭、韓稚振、鄭景玉、柳滄基、金仁泳、金昌俊、金永義、李桓信、鄭一亨、葛弘基がいる。KK 134 卒。

(9) 一九六三年に起きた土着化論争の導火線は一九六二年に発表された柳東植の論文「福音의 土着化와 宣教的課題」であり、この土着化論争に参加した神学者は以下の通りである。李章植、李鍾聲、尹聖範、韓泰東、鄭賀恩、李奎浩、張日祚、洪顯高、韓哲河、全景淵、柳東植。KK 237-238 卒を参照のこと。

(10) パネンベルクとモルトマンの性格上の相違については、特に佐藤敏夫と深井智朗による議論を援用しつつ論じた。

(11) 初期モルトマン神学における実践志向の性格を明らかにするため、博士論文では一九六〇年代後半のモルトマンに注目し、特に『希望の神学』と『十字架につけられた神』の間に書かれた論文 *Existenzgeschichte und Weltgeschichte. Auf dem Wege zu*

einer politischen Hermeneutik des Evangeliums, in: *Evangelische Kommentare*, Januar, 1968. の内容分析をもつてこれを果たした。

- (12) その理由として、われわれはこれらの諸文書全ての中心的起草者が李亨基（イ・ヒョンギ）であることに注目した。李亨基はWCC神学とモルトマン神学の詳細な研究によつて、そこから大きな影響を受けた神学者である。その李亨基が自己の研究成果をもとに起草し、全体的方向づけをした文書群であるが故に、長神大神学とその教育理念を示す諸文書そして大韓イエス教長老会（統合）の二一世紀信仰告白の内容と統合性には、李亨基を介してモルトマン神学が色濃く反映していると見なせるのである。このように長神大と大韓イエス教長老会（統合）の神学的性格が統合的であるということは、同時にモルトマン神学的でもあり得るといふことの一つの証拠として提示できよう。